

# 芥川だより

発行日\*2021年12月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp  
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

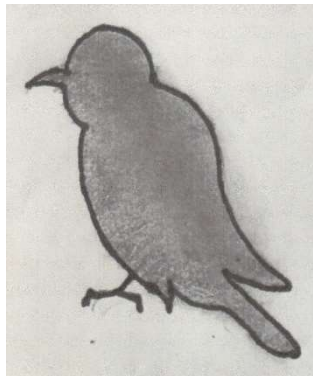
〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*

## 大きな嘘、小さなウソ



有名な薬品会社の研究員達が仲間内で「自分は絶対に飲まないよな」と言い合っていたそうだ。テレビで大々的に宣伝し会社の収益に大きく貢献している栄養ドリンクの話である。研究者たちは自分たちが研究開発した商品だからその成分をよく理解している。しかし、その現場の研究者の声は表に出ることはない。あくまで仲間内の話で終わりいつのまにか消えていく。

昔、山の先輩がタイのチェンマイ奥地で採取した「元気の出る種の粒」というのを周りの人に熱心に説いたが誰も相手にしなかった。ある時、私は食品会社に売り込めば金になるかもしれないと、ある製菓会社を先輩と尋ねたが、担当者は話もよく聞かず物だけを持って部屋を出ていった。後日、研究用サンプル代としてなにがしかの金が送られてきただけだったが、半年後だったか「元気の出る…」という商品とその会社が販売を開始したような記憶がある。

毎日多くの情報が飛び交っているが、本当の情報は少ない。当事者に有利なように加工されたモノばかりだ。皮肉にも本当の情報は多くの人に喜ばれない。たとえ嘘っぽいモノであっても楽しそうなモノが受け入れやすいからだ。そんな訳で世の中は虚飾の張りぼてで包まれてしまう。

怪しい物でも目先の利益になれば大手を振って良い物に仕立て上げてしまう。本当に良いと思われる物であっても目先の利益になりそうでないものはウソのレッテルを貼ってしまう。大きな嘘は大きな流れとなり世界を動かし、真実は小さなウソとして忘れ去られる。こうして世界は虚構に満ち、何が何やら分からなくなる。歴史は繰り返すというが、今の世界状況を見れば、ひとつの帝国の滅亡どころか、人類の滅亡の可能性が強まっているから厄介だ。マスコミや政治家・企業経営者など誰も言わないが、これを防ぐ手立ては誰もが感じていることを実行する以外にない。それは欲望を抑えることだと思う。

死をめぐるあれやこれ (85) 石川 吾郎

オミクロン株が暴くこの国の非独立

コロナウイルスの新たな変異株オミクロン株。感染力がこれまでのものに比較して格段に高い危険なものだという。そこで岸田内閣は早速全世界からの外国人の入国を禁止した。今度の首相は多少学習効果があるのかと思っていたら二日も経たない内に方針転換をして基準を緩めてしまった。これではただでもむずかしい水際作戦の効果は期待薄になってしまった。今政府がすべきことの最重要は、できる限りオミクロン株を入国させずに時間稼ぎをして、その間にワクチンの準備や治療薬の開発を急がせることだろう。◆だがもし水際作戦がたとえ完璧に遂行されたとしても、わが国に変異株が侵入してくる大きな抜け穴が存在している。それこそが米軍基地。そこに勤務する米軍兵士などは、日本の正規の検疫などは一切無視で自由にこの国に出入りしている。このことは矢部宏治著『知ってはいけない』(講談社)でかなり有名になったが、まだ十分に国民に知られていない。先年当時のオバマ米大統領が来日したが、その時も岩国基地に飛来して、ヒロシマで演説をして岩国基地から帰っていった。検疫など一切なしだったろう。というわけで、この国の国境には米軍基地というとんでもない大穴が存在している。◆オミクロン株は、たとえ水際作戦が完璧にしても、おそらくこういった米軍基地の付近からまん延することになるだろうと私は予想する。もつとも、

そうであってもメディアはそのような報道をするのではないだろう。これはわが国が国境をコントロールできていない、つまり完全な独立国と言えないということの意味している……。

芥川だより一七九号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 85	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 93	坂本一光	2
哲学翁いの時事放談 43	祖藏哲	3
大峰奥駈道 49	下村嘉明	6
新型コロナウィルス愚考 (20)	明石幸次郎	7
オクラの山たより 63	因了生	8
隠された歴史 38	満田正賢	11
道をゆく 32	成瀬和之	13
マルクスから学ぶ (10)	成瀬和之	15
俳句	土田裕	15
	影山武司	15
ふみの道草 42	山椒魚	16
編集後記	S K 生	16

素老人☆よもだ帳 (93)

坂本 一光

◆言葉の力

十六年ほど前、大学の外国語教育に関わるセンターを立ち上げ、その責任者を務めたことがあった。教職員達はやる気満々で早速、センタージャーナルを発刊しようという事になり、その巻頭言を書くように言ってきた。こういう時、センター長たる者としては、当該センターの設置理念と目的、大学における外国語教育の課題とそれを実現するための教育内容・方法の改革などについて書くのが普通である。しかし素老人は、全く普通ではなかった。書いたのは、以下のようなことであつた。

\*\*\*\*\*

言葉の力を信じますか

—ジャーナル発刊に寄せて

言葉の力を信じますか。そう問われたとき、ふとよみがえるのは、学生時代に聴いた歌(海援隊)の一節である。

本などひろげて 言葉をさがすより  
人は 空を見上げているほうが  
ずっとかしくなれるんだと  
遥かなる人の声が ぼくに届く

「遥かなる人」(坂本竜馬)は、言葉の力を信じていたにちがいない。なぜか、そ

思つた。また、言葉の詩人は、「言葉なんかおぼえるんじゃないやなかつた」という「殺し文句」でこの問いに止めを刺した。

帰途

田村隆一

言葉なんかおぼえるんじゃないやなかつた  
言葉のない世界  
意味が意味にならない世界に生きてたら  
どんなによかつたか  
あなたが美しい言葉に復讐されても  
そいつは ぼくとは無関係だ  
きみが静かな意味に血を流したところで  
そいつも無関係だ

あなたのやさしい眼のなかにある涙  
きみの沈黙の舌から落ちてくる痛苦  
ぼくたちの世界にも言葉がなかつたら  
ぼくはただそれを眺めて立ち去るだろう  
あなたの涙に 果実の核ほどの意味があるか

きみの一滴の血に この世界の夕暮れの  
ふるえるような夕焼けのひびきがあるか  
言葉なんかおぼえるんじゃないやなかつた  
日本語とほんのすこしの外国語をおぼえたおかげで  
ぼくはあなたの涙のなかに立ちどまる  
ぼくはきみの血のなかにたつたひとり  
帰つて来る

さて、教育の危機が叫ばれて久しく、そ

れは今も続いている。教育の危機は社会の危機である。したがって、教育の質の向上は、すべての教育段階で厳しく問われることになった。うるたえ、右往左往することもあるけれども、大事なことは、危機の本質を見逃さないことではないか。当たり前だが、教育の質は、危機の本質に関わって問われている。

それでは、教育の危機、あるいは社会の危機とは何だろうか。「人間の危機」を置いてほかに何の危機があるか、と思う。二十世紀は人類にとって未曾有の進歩の時代であつたが、「人間の危機」の時代を克服できなかった。危機は、われわれの時代が引き継いでいる。

「人間の危機」の根底には、それがすべてではないが、「言葉の危機」があるだろう。「魂は表現されなければ、それが存在するかどうか、当人にさえもはつきりしない」(加藤周一)のだから。

他者と関わって社会的に生きて行くわれわれは、言葉によって、世界を理解する。言葉によって、自己を表現し他者と交流する。現実の世界は、自然・社会・歴史・文化・人間等の何であれ、正しく理解されさえすれば、われわれのものの考え方を變えてしまうほどの力をもっている。現実の世界からわれわれの中に浸透した力は、翻つて世界の現実を變え、それを支える力になるだろう。教育は、その過程に関わる。

言葉による世界理解。教育の危機の根底で、それが問われている。高等教育の危機

の時代に、われわれはジャーナルを発刊する―その意義に改めて思いを致したい。

\*\*\*\*\*

偶然に引つ張り出した十六年前の巻頭言を読みながら、あの頃から今に至る政治について思うところがあつた。

当時は小泉純一郎首相が『郵政民営化』を最大の目標にして国会を解散し、総選挙を華々しく『小泉劇場』として開幕する少し前であつた。素老人が巻頭言の表題にしたように、『言葉の力』と言う言葉は確かにあつたように思う。素老人は、小泉首相の言葉に力があるとはまったく思わなかつたが、しかしそれでも、第二次安倍政権以降にとりわけて顕著となつた政治劣化の中で言われてきたような、政治家の言葉の無力化・無意味化はまだ始まつていなかったと思う。

「魂は表現されなければ、それが存在するのかわるか、当人にさえもはっきりしない―そうであれば、自ら無力化し無意味化した言葉しか口にしない政治家は魂を持たない、少なくとも自分の魂が存在しているかどうかもはっきりとは分からない政治家であるだろう。

まだ続く「アベ・スガ・キシダ」政治とは、魂が存在するのかわかっても分からない政治家たちによる政治である。

(かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人)

## 哲爺爺の時事放談(43)

祖蔵 哲

### 1. まえがき

いよいよ2021年も最終月に入る。

今年も新型コロナの問題は世界中に停滞し様々な潜在的問題を顕在化してきた。それらは「地球環境問題」として集約されるように思う。それは限られた資源の争奪戦と過度の消費、その結果がもたらした「対立、分断、格差」により「破局」が現実のものとなつてきている。「気候変動」「コロナ・ウィルス」「政治経済難民」「対中国「テカップリング論」などはこれらの問題が可視化されたものである。

このような世界の激動のなかで我が日本は「政治経済的長期停滞」にある。新自由主義経済の破綻による「経済低迷」、代表民主主義政治制度の「政治不信」、そして世界から取り残されている「天皇制思想」による「人権意識の欠如」である。この停滞を打破するために、いよいよ政権が提出したのがストレートなテーマ「新しい資本主義」である。ここでいう「新しい」ということは「古い」に対応するもので「古い資本主義」を否定する言葉である。しかし、「資本主義」そのものはなぜか「否定」の対象にならない。そこで「資本主義」を語るといえば、マルクス「資本論」である。今月はこの問

題をマルクスの「資本論」からその可能性を論議したい。結論を言えば、「新しい資本主義」は地球環境を破壊し自滅の速度を増加させようということである。

(1) 日本版「新しい資本主義」は「地球的危機」を救えるか。

冒頭でもふれたが、自民党新政権が先ごろ唐突に発表したのがその名もズバリ『新しい資本主義』だ。骨子は「成長と分配の好循環」と「コロナ後の新しい社会の開拓」方法として「技術立国」「経済力の復活」「地方活性化」「経済安全保障」となっている。しかし、残念ながら、これらは自民党が「失われた30年間」にずっと言ってきたことと何も変化がない。そして「経済優先全体主義」つまり、「With コロナ」にみられる「経済とコロナ」のバランスを取りながらも、やはり経済を加速させ、裕福層の成長による底辺への分配を達成するという「トリクルダウン型分配」(おこぼれシステム)による「資本主義の延命処置」でしかない。「トリクル分配」はそれが機能していないことは現実のデータにより検証済みである。「分配」にしてもコロナ非常時として「ばらまき分配」を実施したが、この恒常的でない一時的な対応に対して国民は案の定、それを消費支出するのではなく、貯蓄に回した。この先行き不安な世の中では当然の流れである。しかし、この政策のコンセプト「経済成長か規制か」

は資本主義経済システムの問題点をよく表している。つまり、「経済成長はなぜ必要か」という基本的な問いである。新型コロナの犠牲に目をつむつても経済の成長が優先される、さらに極端には「新型コロナで人類が減ぶようになったとしても経済成長が優先である」というところに行きつく。

(2) 人類は自らを滅ぼす時代へ

「人類の滅亡」の可能性は歴史上「地球環境の破壊」からもたらされると考えられている。6600万年前「ジュラ紀」、巨大な小惑星が現在のメキシコに衝突し、太陽光を遮るほど大量の硫酸や二酸化炭素を大気中に放出したされた結果、恐竜など生物の75パーセントが死滅した。その中のわずかな生き残りが現在の人類の祖先となつた。

現在の地球規模的危機は地球外からやってくるのではなく、内からやってくる。それが地質年代学で言われ始めている「人新生」である。「人新生(アントロポセン)」とは現在の地質学上の区分、完新世に続く想定上の地質時代の名前である。つまり、現代の人類は地球地質規模で環境に影響を与えているということが視覚化されているという事実だ。その原因は「産業革命」による自然からの収奪と破壊、そして戦争という最大の環境破壊によるものである。特に核兵器の登場は人類がわずかな時間で地球を破壊できると

いう「悪魔の力」をもった。しかし、なぜこれほどまでに人類はみずから危機に貶めようとしているのか。

「人為的地球規模の危機」は人間の環境破壊行為がもたらす。呼吸にしろ、排泄にしろ、人間が地球上で生活、活動すること自体は環境に何らかの影響を及ぼす、これは避けることができない。そのために、自然には自己回復力（レジリエンス）がある。しかし急速な人間の自然破壊はこのサイクルをも破壊してしまう。それが、「地球の限界」（プラネタリー・バウンダリー）である。現在はすでにこの限界を超えてしまっているというのが最近の研究で明らかになってきた。「ポイント・オブ・ノーリターン」はすでに始まっている。元に戻れない。

### (3) 「経済VS環境」のデカップリングは可能か 「成長も」「環境対策も」

そのような事実の中で「経済成長しながら環境破壊を防げるのか」が問題になる。

いわゆる「経済成長VS環境負荷増加」の「デカップリング（分離）」は可能かの議論である。従来の考え方は経済成長と環境負荷とを別ものと考え、それぞれ独立に増減が可能というものである。その根源思想は「経済成長が環境負荷をコントロールできる」ということに基づく。そして、その反対は「経済成長なしには

環境負荷を削減できない」ということにもなる。この場合の「経済」とは「資本主義」のことを指す。なぜなら、現在までに資本主義以外の経済システムが地球規模で実施されたことがないからである。この強い自信の背景にはあるのが「技術力至上主義」である。つまり、地球を破壊できるような技術力をもってすれば環境破壊制御など簡単にできるといふ驕りである。しかしここでよく考えなければならぬのはこの「技術」の問題である。

### (4) 技術の問題

「技術」とは古代ギリシアの「テクネー」を原意とする。最初、ここでは、自然の観察、例えば、蜘蛛の観察から発展した織物に代表される様に、「テクネーは自然の模倣として生まれる」と考えられていた。しかし、アリストテレスは「テクネーは自然を超越」し、「自然が仕上げに持つて来ることの出来ない物」を完了するとし、「ピュシス（自然）とテクネーは存在論的に区別される」と主張した。

つまり、人間の技術は自然を超えるものであるといふ考えの始まりでもある。そして、近現代ではハイデガーが「ゲシュテール」という概念を用い、技術が人間を生産に駆り立て、その人間が自然を利用するといふように、強制的な挑発性を根源に持つ体制こそが、技術の本質であると言った。

自然と一体であった「技術」が「人間」

だけのものになった。しかし、現代はその「技術」が人間から独立して、一人歩きしているのである。「原子力技術」や「遺伝子操作技術」は一部の技術専門家に理解できないし制御もできない。これらの技術は「閉鎖技術」と呼ばれている。そして「環境コントロール技術」がそのものも「閉鎖技術」になっている。現在「環境負荷低減技術」として期待されているのが、「地球気候工学（ジオエンジニアリング）」である。

これはいわば地球冷却技術であり、実際、冷戦時代に核の冬対策として研究されてきた技術の応用である。さらに「NET」というCO<sub>2</sub>回収技術も注目されている。これらの最新技術は一見して救世主のように思えるが、そこには大きな落とし穴がある。それは予見できない副作用である。核の冬対策では地球に化学物質を噴霧する。それは海洋をさらに汚染する危険も含む。遺伝子操作と同様に未来の世代のどのような影響がでるか予測できないのである。

そして、さらなる「閉鎖技術」の問題点はその関与が専門家集団を統率する時の権力にゆだねられているということである。今日、技術はローカルでなくグローバルである。グローバルをコントロールしているのは誰か。それは、我々、ローカルな国民でもなく、国連でもなく、まさしくグローバル経済の覇権者である。つまり、現在の技術は「経済の手中」

にあるだ。

そして、よく考えてみると「地球環境問題」とは、我々の「生存権」の問題に等しい。先ほども述べたように「地球環境破壊」は「地球の破壊」につながる。人類の滅亡に行き着くからである。しかし、人類といってもさまざま階層が存在する。極端に言えば、地球滅亡を遅らすのには地球人口が10分の一になればよいと考える層も出てくるであろう。そうすると計算上はあと人類の残りの生存期間は10倍引き延ばされることになる。そのような悪魔のような考えが驚くなれ現在進行中である。また、どこかのグローバル物流会社のトップは宇宙ビジネスに熱心である。一部の人間は十分に富を吸い尽くした、滅亡しつつある地球から自分たちだけが脱出できると考えている。それがグローバル経済の本質である。従来「グローバル・ノース」という先進国が「グローバル・サウス」という発展途上国を搾取の対象としてきた。これを先進国の人々の「帝国主義的生活」というが、十分に絞り切った後、搾取のフロンティアが消滅した結果、グローバル覇権は新たなフロンティアを求めている。それが「格差」でもある。このような「グローバル技術独占」は我々の「想像力」を奪っている。単なる欲望に基づく物資優先社会は私たちの未来に対する選択の幅を縮めているのだ。

さらなる問題が技術にある。期待され

る新技術であるが、ここに大きな落とし穴が待ち受けている。それは技術開発が進むほど、人類は逆に苦しめられるという逆説である。これを「ジェヴォンズのパラドックス」という。例えば、技術開発が進み省エネルギー型の冷蔵庫が開発されれば、人はこぞって大型の冷蔵庫に買い替える。それは以前より多くのエネルギーを消費していることを意味する。相対的削減は絶対量を増加さすという欲望資本主義技術の本質の表れであろう。

### (5) 新ケインズ主義「SDGs」の二つの落とし穴

近年の世界経済はグローバル化してきたといわれて久しい。グローバルとは新自由主義経済のことを意味する。ローカルな規制を排除し、自由な経済活動を地球規模で資本主義を展開しようというものである。しかし、ここに問題が発生した、それが地球環境問題や環境難民問題である。それらを国際的に対処するために設定されたのが2015年9月の国連サミットで採択された「SDGs：持続可能な開発目標」である。内容は「貧困、教育、平等」など17項目の到達目標を掲げている。一見するとかなり先進的などりくみである。しかし、ここにもまた大きな落とし穴が待ち構えている。

まず「SDGs 免罪符」である。これは、この「SDGs」が「持続的な」ということを可能にするという根拠のない保証す

なわち「免罪符」になっているというものである。「持続的」とは「経済成長をしつつ」という意味である。つまり、「経済VS環境」の二項対立を残したままの「デカップリング」である。一方ではこれをマルクスの理論にたとえて「大衆のアーヘン」ということも言われている。SDGsの到達目標年は2030年である。2030年までアーヘンと吸い続けたら人類はどうなるのか。

そして次の問題が、先ほども述べた「技術信仰の破綻」である。経済成長が引き起こす環境破壊は技術では止められない。むしろ技術が環境破壊を促進するとは先ほど述べたとおりである。

そして最後の落とし穴が「SDGs ウォッシュ」である。「SDGs ウォッシュ」とは、SDGsに取り組んでいるようにみえて、実体が伴っていないビジネスを揶揄する言葉である。実際はそうでないにも関わらず、広告などで環境に良いように思いこませる「グリーンウォッシュ」が語源となっている。「ごまかし、粉飾」を意味する英語「ホワイトウォッシュ」と、「環境に配慮した」という意味の英語「グリーン」を合わせた造語である。私たちが日常のコマーシャルで「緑の」というキャッチフレーズを見聞きすると、なんだか地球環境保全に貢献している商品であるかのように錯覚する。これが、環境ビジネスの本質である。資本主義は一面「惨事便乗資本主義」ともいわれている。戦

争や自然災害等の危機を利用して儲けを習っている「 कोरोテ」のような賢い資本家がうろろろしている世界だ。

この「SDGs」いわば世界規模のケインズ型改良資本主義である。従来のケインズ主義経済はローカルな国が公共事業を起して経済を活性化させた。対するに今日の新ケインズ主義は国連という地球規模での経済起業である。これは新自由主義の反動でもあるが、しかし、その活動に対して何の規制もないのが最大の問題点である。むしろ、先に述べたように無意味な「免罪符」や危険な「アーヘン」を生産するための経済活動を促進しているのである。

### (6) マルクス「資本主義」哲学の本質

二項対立「経済VS環境」を乗り越えるためにはどうすればよいのか。それはこの二項対立を超越することである。この対立での「経済」とは言うまでもなく「資本主義経済」のことである。つまり解決策は「資本主義の持続、改良」にあるのではなく、「資本主義の超越」にしかない。これは歴史上ただ一人、哲学的立場で資本主義経済を分析研究したK・マルクスの到達点であった。

「資本の本源の蓄積」は、経済市場の「商品」における「使用価値」と「交換価値」の分離から始まる。資本家によって搾取された労働時間がつくる「価値」

(II 「使用価値」)は市場で作為的に「希少性」が加えられさらに増大され蓄積される。最初の搾取は人間の労働であるが、それと同時に「自然からの搾取」も生じている。これが「自然環境破壊」である。つまり、資本主義の本質は「自然環境破壊の促進」によって自ら「希少性」を作り出し、それが一部の資本家に還元されるというシステムである。これがマルクスの発見した資本主義経済の本質である。すなわち、「人間も含めた自然という自己」を食い尽くして延命する「自己言及のパラドクス」の世界である。パラドクスの行きつく先はカオスと自己破壊の世界である。

### (7) マルクス主義を超えるマルクス哲学

マルクスの哲学経済思想とマルクス主義は異なる。マルクス主義はマルクスの単なる一時代の一つの解釈である。哲学というのは本来「普遍」を目指している。「形而上哲学」の永遠のテーマは「真・善・美」である。「真実とは何か」「それは存在するのか」。それが「神」になったり「魂」になったりする。だから、マルクスの哲学は「人間の経済活動とは何か」、それは「普遍的」なものとして存在するのかが研究したのである。普遍性とは、時代や地域を問わない、遍く貫く「真理」である。一方、従来のマルクス主義哲学の根本

命題は「唯物史観」と「生産力市場主義」であった。すなわち、歴史というものを、商品経済を基礎に置く「物世界」と解釈し、物であればそれは自然物であり、法則性を持つとする「必然的歴史観」である。その歴史の必然法則とは「原始共産世界」から「資本主義社会」そして「高度資本主義」から「共産主義」という流れである。その歴史法則は「マルクス主義」ではドグマ化、絶対化され、将来の「共産社会」到来の条件が「高度に発達した資本主義」とされた。「高度資本主義」すなわち生産力が高度に発達すれば、資本主義の矛盾である「恐慌」が繰り返して発生し、それにより労働者の不満が爆発し体制が転覆されるという理論である。マルクス主義はそれゆえに「生産力至上主義」とも呼ばれた。

## 大峯奥駈道 (49)

下村 嘉明

熱心に介護してきた婆さんの寿命もついに尽きる時がきた。十一月五日の未明に息を引き取った。家内が寝ずに介護していた、大往生の様を見届けた後、私を起こしに来て「婆ちゃんが亡くなった」

と、告げた。私は急いで起きて婆さんの部屋に行き婆さんの死亡を確認して、訪問看護師さんや訪問医師に連絡するように家内に指示した。

ベッド周りの物を片付けベランダの窓を開けて空気の入れ替えをしながら、あ終わつたんだなあ、と安堵に似た感情が湧いてきた。ずいぶん長い介護であったが、終わってみれば、あつという間のような気がした。冷たい外の空気を吸って一息入れた私は、すぐに看護師の訪問を知らせるインターホンの音を聞き玄関のドアを解錠した。電話してから15分ほどで看護師は駆けつけてきてくれた。看護師さんは、慌てる様子もなく普段通りに、脈を診て目を開け瞳孔を見る。

いつものように、水道の蛇口から暖かい湯を洗面器に取りベッド脇に持つていつて服を脱がせ摘便をした後、タオルを幾度も湯につけて婆さんの身体を丁寧に拭いてくれた。家内が用意していた服を着せて髪型も整えた後、不要になった介護器具を片付けて持つて帰られた。すぐに医師と看護師が来られた。医師は死亡確認をされ、看護師さんが携帯されたプリンターで死亡診断書を作成されて家内に手渡された。医師と看護師さんもいらなくなつた医療器具を手早く片付けて持つて帰られた。

次は、葬儀の手配である。家内が以前から希望していた近くの小さな葬儀場へ行きパンフレットをもらつてきた。パン

フレットを家内に手渡しながら、少ししたら葬儀場へ電話して家に来てもらい火葬場の手配してもらわないと葬儀の予定が立たないから、と言いつつ私の部屋に戻り朝ごはんの用意を始めた。今日は、おかずもいらぬ炊き込みご飯を三合炊くことにした。にぎりめしにしておけば、いつでも食べられるからだ。炊飯器をセットしてから婆さんの部屋に行くと、家内が葬儀屋さんが七時に来てくれると言つた。

七時前に、葬儀屋さんは来られた。ドライアイスが入つた袋を持つて、婆さんが眠るベッドの両脇に四個のドライアイスを入れられた。家内から、死亡診断書を受け取り、すぐに市役所へ電話して火葬の順番を取られた。一番早くて七日の一時であった。「後日、私が火葬場の職員に聞いたところ、当日の火葬場の利用者は18名であった。多い時には20名になることもあるという話だった。」

葬儀の手配まで出来れば、一安心である。あとは家族葬なので連絡も少なくすぐに来たが、家内の妹家族は、東京なので通夜に合せて車で来ると連絡があった。妹本人は、霊感の強い人なので、五日の朝東京を発つ予定であった。なんでも彼女の話では、もうそろそろやばいと思ひ勤め先に休暇届を出し、朝一番の新幹線に乗りとうと思ひ寝たら、未明の二時過ぎに、霊気を感じさせる風を感じて起きた。その時に、彼女は婆さんが逝つ

たんだなあと思ひ感じたらしい。家内から電話が来てやはりあの時に、母である婆さんが最後の挨拶に来たんだと思つたと涙ながらに語つた。私は、そんな事があるんだなど不思議な気持ちで話を聞いた。私は、父や母が亡くなつた時には、何も感じなかつた。やはり、霊感がある人とならない人とは違ふのだと思つた。

霊感と言えは、婆さんが亡くなる一ヶ月前に、わたし独りで近くのショッピングモールにある占い師を尋ねた。昔、婆さんが良く通つていた占いコーナーである。私は、婆さんと私の生年月日を紙に書き開店直後に行つた。占い師は、大阪のおばちゃんをイメージさせる婆さんで、私の要件を聞き、二人の生年月日から、婆さんは三ヶ月以内に仏さんになると言つた。あなたの仏と婆さんの仏が出会うというのである。

占い師の言葉は、私が予想していたことと同じだったので、10分余りの会話で、二人分の料金4千円を払つて家に帰り、家内に報告した。家内も何となく予想していたみたいで特別な驚きも見せなかつた。私が、占い師に行つたのは、半世紀ぶりだった。





## 新型コロナウイルス禍愚考(その20)

明石 幸次郎

いの中の電話の相談員をやって6年が経ちますが、相談員としては、20年、30年やり続けている人から見ると、まだまだ、ひよこみたいな存在の様なものです。ひよこでも、年齢的には、こちらでも古希を過ぎたエエ歳の爺さんです。それなりに人生を生きて来て苦しいこと、楽しいこと、辛かったこと、失敗したこと、又、多少の成功とかで達成感を味わった経験を積んできてはいます。

相談員としてはひよこかもしれないが、苦しんでいる人、悩んで自殺する人、誰も聞いてくれない愚痴をこぼす人など対しては、共感して聴くことによつて、多少なりともお役に立てたかなあと自己満足をしています。

この6年間の相談員として愚考すると、悩み、苦しんで心身ともに疲れて電話を掛けてくる人の共通点は大きく二つあり

ます。自分の悩み、苦しみを身近で聞いてくれて愛情、友情を掛けてくれる人がいないということ、自己の存在を少しでも認め、承認してくれる人が肉親を含めて周りにいないということです。

これは心理学者も言われていることですが、多くの人間の根源的な要求は、自己を保存、守ろうとする欲求と他者から承認や愛情を求める欲求であるだろう。

それがそこなわれるとき、病的な自己目的化や自己絶対視に陥って、出口のない自己追及に入り込むか、自己の価値観、存在の解離という形で自己分裂を起こすしか、自己を保つ術が無くなってしまふと言われています。

この二つの基本的な要求が日々の生活の中で満たされていけば、異常な心理状態に陥ることもないが、誰でもがそんな恵まれたときばかりではありません。問題は、それがうまく満たされない状況でどうするかですね。

重要なのは、自己目的化や自己絶対視といった閉鎖回路に陥らないように用心すること、そのためには、時々自分を振り返り、狭い価値観や情報と言つた一つの視点に捕らわれ過ぎないことである。捕らわれとは思ひ込み過ぎず、それなしでは生きていけないと思つていることも、決してそんなことではなく、逆に自分の可能性を小さく縛っているのであるという意識を持つことです。

もう一つは、他者との相互的な関わり

です。一時的に自分だけの閉鎖回路に陥つたとしても、他者を介することでそこから脱することが出来るのです。何でも相談出来る、安全基地となる存在が身近に一人いるだけでも、追いつめられるリスクは半分以下になる。その意味でも、日頃から身近な存在を大切にする関わりが大事だと言えます。

電話を掛けてくる人は全てではありませんが、当人なりの異常な心理状態で思い詰めて掛けてこられます。身近に話す相手もいなく孤独で孤立してしまつて、何とかいのちの電話にたどり着いて掛けてきた人です。力のない、沈む声で最初は、鬱を抱えてしんどい、生きるのが嫌

になった、生きてても意味がない、仕事が出来ないのが辛いとか、言われながら聴いていくうちに、相手が何を聞いてほしいのかを待つてると、言われるのは、自分のしんどい生立ち、生活の話です。大抵は親からのDV・ネグレクト、学校でのいじめ、職場での人間関係、夫のDVが原因で自分の存在に対する肯定感が持たなくなり、何よりも辛いのは周りから存在を否定された承認されない状態を語られます。他者、肉親、または社会との相互的な関わり方を無くして、孤立、孤独を深めて閉鎖回路に陥つてしまつて

いるようです。そこを、電話の相談員という他者が、閉鎖回路に陥つてどうすることも出来ない電話の向こうで訴える人に対し、共感し、相手の存在を

認めながら追いつめられた気分を少しでもほぐすかが、相談員の聴く力です!!

十人の人を話しを聞いてもその中で、一回位は相手の声が、一時間くらい話を聞いているうちに元気になつてくるのを感じることがあります。そういう時は、最後に相手が聞いて貰つてありがとう、少しは気分が楽になりましたと言つて貰えます。自己絶対視の閉鎖回路から自分の力で抜け出す、きっかけに私と言う他者を介してなれたらと願つて電話を終了します。

二十一世紀が始まつても、更なる金融資本主義のグローバル化と格差の拡大、分断といった中で、ひたすら利益と快適さ欲望を追求し、弱肉強食のお金中心の競争がくり広げられてきました。多分、ポストコロナ後も岸田首相が言っている新資本主義などと言うような意味不明な状態にはならないので、いやが上でもアメリカ、中国中心の政治、経済競争に日本は巻き込まれ、格差、分断が広がつていくのではないのでしょうか?

しかし、これからも、他者の痛みから目を背け、自己目的化と自己絶対視の中で、自分だけが良ければという社会は、自分も決して幸せにはなれないと確信して言えます。

先回は蕪村の詠史の句を話題にしましたが、今少しその話を続けます。実をいとうと蕪村は故事や古典の知識に寄りかかって句を詠むことには批判的でした。たとえば出石の俳人霞夫に宛てた手紙に次のような記述があります。

人の知らぬ古語故事などを申し出で候て、人をおどかし候ふことなどは以ての外悪しきことに候。なるたけは古語故事を用いず、平生のことのみを以て句を仕立て候こと第一に候。古語故事をつかひ候ふ者を手といたし候はば、物知りたちはいずれも俳諧の上手にてこれあるべく候。

一七七六(安永五)年一月一日付

この書面によると蕪村は古語故事を使って句を作ることには否定的であり「以ての外悪しきこと」とまでいっています。では、なぜ蕪村は詠史の句を作ったのか、が問題になります。そのことに触れるためにはやはり当時の蕪村が置かれていた俳壇の状況について少しばかり知っておくことが必要です。

蕪村が活躍した十八世紀後半、およそ数十年にわたって蕉風復興運動がさかんに展開されていきました。この運動をリードした人々の主張で共通する一つの方向は句意を理解できないような言語遊技的な技巧の排除にありました。つまり、句意の平明さを求めるということでした。難解な句ではなく平明な句であれば誰もがつくることができる。運動が発展する背景には俳諧が近世の社会に広く浸透し、俳諧人口の爆発的な拡大ということがあったことは否定できません。

蕉門の流れには地方系俳人といえる美濃派、伊勢派の流れをくむ人々と江戸の其角や上方の貞門派や談林派の流れにある都市系俳人といえる人々がいました。

前者は事物をありのままのとらえ、自分の感動を素直に表現することを追求して世の人から「心の俳諧」と呼ばれましたが、後者は句の趣向よりも言語表現の面白さにより高い価値を置き人々から「詞の俳諧」と呼ばれました。この二つの流れが相互に交流、影響し合って、その差異を薄め合ってしまったのがこの運動の内実であったといえます。そして、もっとも肝腎なことは結局のところ運動をリードしたのは地方系の側であり、その主張が蕉風の主張として定着していった点にあります。

蕪村は蕉風復興運動の高揚期のあたりに活躍していたのですが、もともと京の俳壇は都市系の俳諧が盛んでしたが、明

和年間(一七六四〜一七七二)となると地方系の俳人の活動が活発化してきます。美濃派の集まりに蕪村の旧友である丹後の竹溪や蕪村に近い几董までも参加するまでになりました。こうなるとは蕪村も気にせざるをえません。

蕉風の主張の中核となっていた「心の俳諧」をもう少し見ていくと、その中で「情」と「姿」という二つの言葉がよく議論されています。人の心、つまり「情」を重視するといっても、その「情」が生まれる原因となる「物」、または、「こと」が不可欠です。これが「姿」です。

そして議論は進んで、読者が作品中の形象を自己の内部にイメージに地方系の俳人たちは注目するようになります。人々の心に生まれるイメージこそが外界、作者、作品、読者を媒介する、という理解に到達します。そうなる中、中途失明した作者が「心に姿を見る目もひとしく」と句作を楽しんでいることが評価されたり、「名月や眼をふたげば海と山」といった作品が登場したりしました。「発句は屏風の画と思ふべし。己が句を作りて目を閉じ、画になぞらへて見るべし」と門人たちに説くようにもなります。こうした俳壇でのイメージの重視には心に映る影像を重く見ていた同時代の漢詩壇の影響も無視できません。明和四年刊の俳書には次のようにあります。

詩は有声の画、画は無声の詩にし

て、

俳諧も有声の画なる教えを尊ぶ。

蕉風復興運動の主流ともいえる流れはここにまでいたったのです。

こうした俳壇の状況にあつて若い時期に江戸で俳諧を学んだ蕪村は「詞の俳諧」の流れに立っていたとはいえず、画家でもある彼は当然のことながらイメージや影像に心を寄せました。いや、それどころかイメージを最も活用する俳人でした。次の二句はそんな蕪村をよく示しています。

冬ごもり 心の奥の よしの山  
散りて後 おもかげに立つ ぼたん哉

二

では、何が蕪村には不満だったのでしようか。そのことが分かるいくつかの蕪村自身の記述をあげます。後に現代語訳をしておきます。

① 後の月 鳴(しぎ) たつあとの水の中  
(この句は) 所謂しほからきと申す  
句に候へど、愚者は折々わざと此の  
句法を用ひ候。当時の俳風すべて高  
邁洒落を専らといたし候ふ故、うち  
ききはどふやら貴き様にて、句は甚  
だうすく、体もなき発句ども多く、  
さてさて気の毒にて候。



後の月 鴨(しぎ) たつあとの 水の中

(二)の句は やや古くさいさもわざとらしくヒネリをきかした句作だが、私は時々わざとこの句法をつかいます。今どきの俳風はすべて気品が高くてあっさりとする事をもつばらにしていますため、ちょっと聞いたところは どうやら素晴らしいように聞こえても、その句は内容が薄く、発句としての体をなさないものが多く、さてさて残念なことです。

「しほからき」とは、古風な印象をともしないつつわざとらしいヒネリをきかした句作であることを意味する言葉で、褒め言葉ではなく批判的な意味合いをこめた言葉です。しかし、あえてそうした「しほからき」句を蕪村が詠んだのは当時流行していた蕉風俳諧の「句は甚だうすく、体もなき発句」へのアンチテーゼとしての効果をしたものでしょう。次にあげるのは蕪村の門人たちの句に対して一人の句を例にして記した蕪村の評です。

② 湖の 汀(なぎさ) すみけり 秋の水

よき句なれど、俳諧の流行、ただ洒落にけしきの句のみに成りゆきて、俳力日々に薄く成るの嘆かわしければ、これらの句はおのおの撰をもらし侍る。

湖の 汀すみけり 秋の水

よい句であるけれども俳諧の流行がただたださらつとして情景をそのままに詠んだ句だけになっていって、俳諧の表現力が日に日に衰えていくことが嘆かわしいので、これらの句はそれぞれ高次の句としてとりません。

①と②の文章を読んでいくと、蕪村が抱いた当時の俳壇で流行した蕉風俳諧への不満は、風雅趣味に寄りかかった、もつともらしい、これといった捉え所のない平板な句で情景をそのまま詠んだ句のみが喜ばれていて、「俳力」に乏しい句ばかりが横行しているということにあるようです。批評の対象となった「湖の汀すみけり秋の水」の句は確かに平明で美しい情景の句ではありますが、何のヒネリもなく素直に見たままの風景を詠んだ句です。優雅で美しいだけの句であれば短歌や連歌と同じものとなり、俳諧を独立した文芸として確立した芭蕉翁の努力も無にかねません。蕪村の危機感はそのにありました。

蕪村にとつて「俳力」とは俳諧における機知性や作為性を意味していますから、彼はこの「俳力」の欠如という傾向に俳諧衰退の危ない兆候を感じ取っていたのでしよう。それへの対処として蕪村は意識的に作為性のある句作、たとえば「五月雨や大河を前に家二軒」といった

句を作ったのでしよう。詠史の句作もこの一環であったであつたと考えられます。

三

古語や故事に寄りかかった句作に批判的であつた蕪村が和漢の古典的な情景をつかった句作りをしたのは平明でこれといったことのない当時流行の句作への批判でありました。

蕪村が「著しく普通とは違つて目立つ」という意味の「けやけし」という語を用いて「指南車を胡地に引き去る霞かな」を例にして自作を説明した文があります。

指南車を胡地に引き去る霞かな  
この句けやけく候へども、折節は致し置き候。「去る」と云ふ字にて、「霞」とくとすわり申し候か。

この句は普通とはずいぶん違つていますが、ときどきこのような句を読んでもあります。「去る」という字によつて「霞」がしつかり句の中に位置をしましました。

「けやけし」という語が句の素材や趣向の特異性をさす評語として使われていきます。平明で風雅趣味の当時の蕉風からみ

れば、古代中国の西域遠征軍の隊列を彷彿とさせる「指南車を胡地に引き去る霞かな」の句は「けやけし」の句であると敬遠、否定されるべきものであつたでしょう。しかし、蕪村は当時の蕉風への批判ということから機知性や作為性が過剰な「しほからき」句と同様にこのような趣向の特異な句をあえて作つていったのです。和漢の古典的な情景や故事に句作の材料を求めていったのはそうした理由でした。ですから故事を読み込むことが目的ではなく、故事を取り巻く歴史的な空間を句の中に取り込むことであつたのです。つまり、そうすることで日常では経験できない虚構の「けやけき」空間が句の中に構築され、作者の自由な想像力と豊かな叙情とが広く羽ばたいていく場が作られたのです。一句の趣向にさまざまな虚構を設定するための方法・手段として詠史の句。それが衰えつつある「俳力」の回復のために蕪村が意識的に試みた一方法でした。例えば次の二句。二句とも「新花摘」所収の句です。

- ① 洪柿の花散る里と 成りにけり
- ② ぼうふりの 水や長沙の 裏借家

①の句は表面的に読めば「寂しきは根岸の里の秋の夕暮れ」と同じく何ということもない句ですが、「花散る里」が「源氏物語」第十一帖「花散里」に依拠した句と知れば俄かに句の内容が変わつてき

ます。平安朝の貴族たちが甘い恋の恋を  
ささやいた京郊外の地も今は洪柿の花が  
散り続く侘びしい光景の句。華やかな王  
朝の恋物語をひっくり返した句です。

②の句の「ぼうふり」は蚊の幼虫の「ボ  
ウフラ」のこと。中国の名勝蕭湘八景で  
名高い長沙の裏町の借家。そのドブ溝に  
ボウフラがわいて今しも盛んに上下運動  
をしている、という句意。①と同じく美  
の裏側にある醜を見つめた句です。

いうまでもなく①と②の句はともに和  
漢の古典的情景をつかうことよって大  
きく句の空間を押し広げています。これ  
が詠史を用いた理由でした。

#### 四

蕪村の詠史句を読んでいくと歴史上の  
出来事や人物を題材とする川柳と蕪村の  
句には同じ発想の作品があるのに気づき  
ます。

たとえば、鎌倉幕府を開いた源頼朝の  
頭は大きかったという伝説があり「膝枕  
政子の股に しびれきれ(大頭なので政子  
が膝枕していると、頼朝の頭はとても重くて政  
子はしびれが切れてしまった)」という川柳  
がありますが、蕪村にも次の句がありま  
す。

③ 頼朝の 頭巾仕立てる 笑ひかな

季題は「頭巾」で季節は冬です。針子が

夜なべ仕事で「なんて大きな頭なの」と  
笑いかみ殺しつつ頭巾を縫っている情  
景ですが、この句には冬の夜のシーンと  
した静けさと忍び寄ってくる寒さが感じ  
られます。頼朝の大頭に材をとった川柳  
の作品には先ほど挙げた作品以外にも次  
のものがありません。

大そうな蛭が小島の袖頭巾

(柳多留拾遺)

拝領の 頭巾梶原縫い縮め

(俳風柳多留)

「蛭が小島」は源頼朝が流されたところ  
で「袖頭巾」は「おこそずきん」のこと、  
また「梶原」は頼朝の寵臣であった梶原  
景時のこと。どちらも頼朝の大きな頭を  
笑い飛ばしている川柳ですが、季節感  
感じられませんか。そこが蕪村の発句との  
違いでしょうか。

もう少し例をあげると源義朝が平治の  
乱に敗れ、尾張の野間にある長田忠致の  
家に逗留中、入浴の折りに長田に忙殺さ  
れた故事を詠んだ次の句があります。

④ しぐるるや 長田が館の 風呂時分

一七八三(天明)三年 騷道宛の書簡

この句は、にわか降り来る時雨に対し  
て事態が急転しようとする寸前の長田の  
館を配し、降ったりやんだりして変化き  
わまりない時雨の姿をとらえた诗情ある

句となっています。句の主眼は義朝の悲  
劇よりも時雨にあります。これに対して  
川柳では義朝の入浴中の死を揶揄し笑い  
飛ばす内容となっています。

義朝は 抜き身をさげて 討ち死にし

(俳風柳多留)

自ら湯灌(ゆかん) 遊ばした左馬頭

(俳風柳多留)

「湯灌」は死体を納棺する前に死体を清  
めること、また「左馬頭」は義朝の官職  
で義朝を指します。

蛇足ながら蕪村自身は「しぐるるや長  
田が館の風呂時分」を「よろしからぬ句」  
と書簡に書いており満足のいかない句で  
あったようです。たぶん「長田が館の風  
呂時分」では、皆が知る逸話の大雑把な  
提示だけに終わって、何のヒネリもない  
趣向に欠ける句と考えたからでしょう。  
確かに

⑤ 鳥羽殿へ 五六騎いそぐ 野分哉

と比較すれば描写性に欠けていると言わ  
ざるをえません。

単純化すれば蕪村の詠史句と川柳の詠  
史句の違いは季題の有無と滑稽の強弱に  
あります。有季の発句で中心となるのは  
あくまで季題であり、その季題の情趣を  
際立たせるために情景の背景として歴史  
の故事が使われます。「鳥羽殿へ五六騎

いそぐ野分哉」の句でも主眼は野分にあ  
り、その野分のただならぬ気配に見合う  
軍記的かつ絵巻物的な情景が配されてい  
るのであって、その逆ではありえない。  
配された故事と季題との緊張がほどよく  
保たれていることが詠史のよい発句の条  
件です。この二つのものバランスが崩れ  
ると蕪村の詠史句といえども川柳と見分  
けがつかなくなり、時として川柳の高笑  
いに押し流されてしまうこともありまし  
た。たとえば次の句です。

⑥ いもが子は鯁喰ふほどに成りにけり

落日庵句集より

「落日庵」とは「夜半亭」と同じく蕪村  
の俳号の一つで、「落日庵句集」は蕪村  
の門人が筆録した句集です。

「鯁」はテトロドトキシンという猛毒  
で有名なフグのこと。「鯁を喰うほどに  
成りにけり」が難しいですが、「鯁食ふ  
無分別、鯁喰はぬ無分別」ということわ  
ざがあつて、「フグを食うか食わぬかの  
分別つく年ごろになった」という意味に  
取れます。

この句に盛られた故事は平清盛が白河  
院の御落胤であったということ。「平家  
物語」巻六に清盛の父平忠盛が「いもが  
子は這ふほどにこそなりにけれ(院が御寵  
愛なされた女性の子はハイハイをするくらいに  
なりました)」と白河院に申し上げると院  
は「忠盛取りて養ひにせよ(その子は忠盛

## 隠された歴史(38)

満田 正賢

が引き取って養育せよ」といったという話があります。つまり、この句は白河院に寵愛された祇園女御を忠盛が妻として迎えた、そして、その時にはすでに祇園女御は白河院の子を身ごもっていたという逸話を踏まえ、その子が分別のつく年ごろに成長したと嘆じた句です。院が父であるはずの子を「お前の養子にせよ」といわれた忠盛の当惑した顔が目に浮かぶ句で、ちよつとばかり皮肉を効かせた上にユーモアも多少感じられる句です。

しかし、この句には冬の季題である「鰻」に関わって何の情趣も生まれてはいません。季題が完全に故事に飲み込まれています。その点からすると詠史句としては不出来と言わざるをえず、川柳と変わるところはない、と評価するほかはありません。

もはや言わずもがなですが、同じ故事を使った川柳があります。いささか下品に過ぎるのが玉にキズなのですが。

喰ひかけの 芋 忠盛に くださるる

(俳風柳多留)

「芋」が愛する女性を意味する「妹(いも)」に掛けてあるのはいうまでもありません。川柳の持っている強烈な即物的ともいえる描写の力がよく発揮されています。

現代では『修文殿御覽』が使われたと見るのが妥当であろう。」

「日本書紀が利用した類書は『藝文類聚』ではなく『修文殿御覽』である」という説は、勝村哲也氏の「修文殿御覽天部の復元」という論文によって提起されたと言われています。私はこの勝村氏の論文を見つめるのに苦労したのですが、この論文が「中国の科学と科学者」という本に収録されていて、中之島図書館にある(但し貸出禁止)ことを知り、中之島図書館の閲覧室でやっと読むことが出来ました。勝村氏の論文の要点を私なりにまとめると次のようになります。

「日本書紀の出典は『藝文類聚』ではない、という根拠は、日本書紀の冒頭の開關(かいびやく) 神話記事に引用された『三五曆紀』の記述が、日本書紀編纂後に成立した『太平御覽』の冒頭にあり(『藝文類聚』の三五曆紀引用文は二十三番目に出てくる)、その記述が『藝文類聚』の記述より日本書紀の冒頭記事の記述に近いという事実である。小島氏は、その内容が『太平御覽』に継承されていると言われる『修文殿御覽』や『華林遍略』ではなく、現存している『藝文類聚』が出典元であると断定してしまつたことに、考察の限界があった。」

日本書紀の冒頭にある開關神話の現代語訳、原文、『藝文類聚』と『太平御覽』の三五曆紀引用文を比較してみます。

(日本書紀冒頭の現代語訳・山田宗睦訳)  
昔、また天地は分れず、陰陽も分れず、鶏卵の中身のように不安定で、混沌のうちには兆しをふくんでいた。そのうち清明な要素は薄くなびいて天となり、重く濁つた要素はとどこおつて地となるときがきたが、清明なものが集合するのはたやすく、重く濁つたものがこり固まるのはむづかしい。それで天が先にでき、地は後にできたのである。天と地とができたのちに、神がその中間に生じた。  
(日本書紀原文)

古、天地未剖、陰陽不分、渾沌如鶏子、溟滓而含牙。及其清陽者薄靡而爲天・重濁者淹滯而爲地、精妙之合搏易、重濁之凝竭難。故、天先成而地後定。然後、神聖、生其中焉。

〔太平御覽・天部・元氣〕三五曆紀引用文

\*この引用文は太平御覽全体の冒頭部に出てきます。

曰…未有天地之時、混沌狀如雞子、溟滓始牙、濛(莫孔切)鴻(胡孔切)滋萌、歲在攝提、元氣肇始。又曰…清輕者上爲天、濁重者下爲地、冲和氣者爲人。故天地含精、萬物化生。  
(『藝文類聚・天』三五曆紀引用文)

\*「天部上―天」の項目は『藝文類聚』全体の冒頭部ですが、三五曆紀引用文はその中の二十三番目に出てきます。

曰…天地混沌如雞子、盤古生其中。

萬八千歳。天地開闢。陽清為天。陰濁為地。盤古在其中。一日九變。神於天。聖於地。天日高一丈。地日厚一丈。盤古日長一丈。如此萬八千歳。天數極高。地數極深。盤古極長。後乃有三皇。數起於一。立於三。成於五。盛於七。處於九。故天去地九萬里。

日本書紀冒頭箇所の原文が、藝文類聚よりも太平御覽に近いことは一目瞭然だと思えます。

しかし、この勝村氏の見解に異議を唱える学者も出ています。池田昌廣氏の『日本書紀』と六朝の類書」という論文です。この論文はネットで検索出来ません。池田氏の論文の中で私が注目した部分は次の部分です。

①(日本書紀が)一見したところ多数の漢籍から引用したと思われる出典の過半が、実は類書からの孫引きであったことに今日異論はない。ただし、長く通説であった『藝文類聚』利用説には強力な反証がなされており、すでにそのままでは成り立ちがたい状況にある。反証は『書紀』冒頭開闢神話の出典である『三五曆紀』の出所をめぐってなされた。『藝文類聚』説は『三五曆紀』の引用を合理的に説明できない。『藝文類聚』説への批判の過程で提起され、目下『書紀』研究者のあいだで共通の

理解になりつつあるのが『修文殿御覽』利用説である。

②『書紀』の述作者が手にした類書が『藝文類聚』でないことは、『藝文類聚』説への批判的論考や別項の考証によっても明白と思われる。しかし、利用された類書に『修文殿御覽』を擬すれば疑問が氷解するわけでもない。『修文殿御覽』ではうまく説明できない出典があるからだ。

③類書間の継承関係をおおざっぱに開示しておく。

『華林遍略』(長文) ↓ 『修文殿御覽』(短文) ↓ 『太平御覽』(短文)

『文思博要』(長文)  
『藝文類聚』(短文)

(一)内の長文・短文とは類書が箇条化する引用文の長さの傾向をいう。このうち現存するのは『藝文類聚』と『太平御覽』のみだが、『修文殿御覽』は条文をそのままに『太平御覽』の中にほぼ保存されていることが明らかである。

④小島(\*「上代日本文学と中国文学」

の著者・小島憲之氏のこと)が『藝文類聚』を出典に認めたもののうち、『太平御覽』に見つからない条文がある。たとえば顕宗紀二年条の出典「晏子春秋」(『藝文類聚』巻二四所引)が『太平御覽』に見当たらないのは、どういうことだろう。前掲「丹陽尹湘東王善政碑」も『藝文類聚』にあつて『太平御覽』には見いだせない。

⑤三百六十卷の『修文殿御覽』をもとに千卷の『太平御覽』を編纂する過程は、もっぱら増補作業だっただろう。一中

略に逆七百二十卷の『華林遍略』から三百六十卷の『修文殿御覽』を編纂する作業は、ほとんど条文の削除または省略だったろう。つまり、『華林遍略』は『修文殿御覽』の条文のみならずこれにない条文をも含んでいたことが明らかなのだ。

⑥『辨正論』陳注に引かれた『華林遍略』佚文から領會されるように『華林遍略』の条文は比較的長文であったようだ。これは、条文採録時の節略がなかったか、あるいは少なかったことを意味する。

私は、この池田氏の考察にも疑問を持っています。それは、今回この類書の研究に興味を持ったきっかけが、古田史学会報No.一五九に掲載された服部静尚氏の論文「磐井の乱は南征だった」の内容に反論したいという欲求からだったからです。服部論文の内容は、「継体紀磐井の乱の記述の中の物部鹿火を出征させる記事に漢籍『芸文類聚』の『戦伐』からの引用箇所が六箇所あるが、引用された『戦伐』はすべて『南征』の戦伐であり、確率論からいって、磐井の乱自体が『南征』の戦伐であることを証明している」とするものでした。私はかねてよりこの結論の論理性に強い疑問を持っていました。それゆえに、「漢籍『芸文類聚』の『戦伐』

からの引用箇所が六箇所ある」という部分を否定する材料として類書研究の所論に注目したのです。

私は最初、東野氏の小論を読んで、『修文殿御覽』を探していましたが、やがてそれが「いまは滅んだ類書」であることに気がきました。しかし『修文殿御覽』(隋の前代である北周朝の編纂)の内容は『太平御覽』(北宋期九八三年成立)に引き継がれていることも判明しました。

そこで、服部氏に「主な漢籍の原文はこれを検索すればネットで見ることでできる」と教えられた「維基文庫」をネットで検索し『太平御覽』の内容を確認しました。しかし、不思議なことに、物部鹿火を出征させる記事に引用された『藝文類聚』・武部・戦伐』の中の記事はいずれも『太平御覽』・兵部・征伐上・中・下』の中には発見出来ませんでした。そこで『太平御覽』・兵部九十卷』全体に搜索範囲を広げましたがそれでも発見出来ませんでした。なお『藝文類聚』・武部・戦伐』九十七例と『太平御覽』・兵部・征伐上・中・下』百三十三例とが共通して取上げられている引用文は七例しか認められませんでした。北宋期に成立した『太平御覽』が初唐期に成立した『藝文類聚』に収録された記事をほとんど収録していないことの理由がわからず、私は再度のいきづまりに至っていました。その時に前述の池田昌廣氏の『日本書紀』と六朝の類書」という論文を見つけたのです。

私は継体紀の磐井の乱の記事の引用例が『修文殿御覽』を踏襲した『太平御覽』にないことから、日本書紀の出典は『修文殿御覽』ではなく、『華林遍略』であるという池田昌廣氏の説に飛びつきました。しかし、冷静に考えると、『藝文類聚・武部・戦伐』九十七例と『太平御覽・兵部・征伐上中下』百三十三例が共通して取上げられている引用文が七例にすぎないという事実は池田氏の説では説明できないと気がきました。池田氏は、勝村哲也氏の見方を踏襲して、『華林遍略』が『修文殿御覽』と『藝文類聚』の共通する源流であるという見方をとっていました。

しかし、私は一方で、付晨農氏の「齊梁類書の誕生―初期類書の系譜と南朝士人」という論文をネットで見つけました。付氏によれば、『華林遍略』は梁武帝の命令で天覧十五年（五一六）に編纂が開始しています。そして「唐代初期には『華林遍略』→『藝文類聚』という南朝類書の系統があつたが、唐代中期以降に『修文殿御覽』→『太平御覽』という北朝類書の系統へと変化した」とする劉安志氏の論文「關於中古官修類書の源流問題」（『新資料与中古史論考』収録）を紹介しています。

すなわち、『藝文類聚』と『太平御覽』は別系統であり、日本書紀の中に多く見られる『藝文類聚』からの引用は、実際には『藝文類聚』の源流である南朝系の『華林遍略』からの引用であつたと考え

れば、「物部麁鹿火を出征させる記事の中の『藝文類聚・武部・戦伐』からの引用記事が、『太平御覽』の中には発見出来ない」という事実をより明確に説明出来ると考えました。

寛平三年（八九一年）に藤原佐世が編纂した『日本国見在書目録』の『雑家』欄に記された計二千六百十七巻の中には、『華林遍略』六百二十巻、『修文殿御覽』三百六十巻、『藝文類聚』百巻、の三つの類書が載っています。

\*『日本国見在書目録』は『続群書類従』巻三十輯（しゅう）下に収録されています。

『日本国見在書目録』は日本書紀の成立後百七十一年経った書物ではありませんが、少なくとも日本書紀の編者が利用した類書は、この三つの類書の中にあると思われま

す。私は最終的に、「日本書紀には複数の人物が述作者として携わっており、各々が漢籍を座右に置いて執筆していた。『藝文類聚』を座右に置いていた述作者と『修文殿御覽』を座右に置いていた述作者がいた」という考え方に至りました。但し、述作者が『藝文類聚』を座右に置いていたと思われる巻については（又は巻によっては）、座右に置いていたのは『藝文類聚』ではなく、『藝文類聚』の源流たる『華林遍略』であつた可能性が強いと考えています。その理由については次回述べたいと思います。

## 「道をゆく」（32）

### 「熊野街道」（一九）

成瀬 和之

伊勢路から中辺路に戻って、熊野三山の、熊野速玉大社、熊野那智大社を巡る初心者向けのコースを二つ紹介します。

①熊野速玉大社から王子ヶ浜を経て高野坂へ

昔の巡礼者は熊野本宮大社から熊野川を舟で下り、熊野速玉大社に参拝。その後、熊野灘沿いに那智へ向かいました。

本コースはその第一歩、速玉大社から王子ヶ浜を経て、昔の面影を残す高野坂を歩きます。坂といっても標高差は五〇メートルほどで、熊野灘の眺めが美しい古道歩きの入門コースです。

大社の鳥居を出て真っ直ぐ行けば、新宮城跡への入口があります。ここから一〇分ほど登れば丹鶴山上で新宮城の本丸がありました。紀州徳川家の家老・水野氏の居城として一六三三年に新宮城は完成しました。現在は石垣だけ残り桜の名所として知られる公園となっています。

さらに東に進むと、正面に小高い蓬萊山が見えてきます。古代より神の降臨する山とされ、その南麓に熊野信仰と関わりの深い阿須賀（あすか）神社が祀られています。主祭神は事解男命（ことさかのおのみこと）ですが熊野三山の神も祀り、平

安時代から「阿須賀王子」とされてきました。また平安末期の古文書に、熊野権現は神倉山に降臨した後阿須賀へ遷ったと記されています。

阿須賀神社から住宅街を二〇分ほど東南に進んだ所に浜王子（王子神社）があります。古来、海の神を祀っていた宮が、後に王子社になったのでしょうか。「大浜レクレーションの森」になっている防風林を抜けると、砂礫海岸の王子ヶ浜に出ます。はじめは堤防の上の歩道を歩き、途中から浜に降ります。広大な浜辺のウォーキングが三〇分ほど楽しめます。浜の南に突き出た岩山の磯は御手洗（みたらい）海岸といい、昔の参詣者が身を浄めたところでした。その手前に流れる小川の横でJR紀勢本線のガード下を潜れば高野坂登り口に出ます。少しわかりにくい小川の横の細道です。

高野坂は海沿いの高台を超えて行く二キロメートルに満たないルートです。自然林に包まれた石畳が残る坂道を一〇分ほど登れば、「御手洗の念仏碑」と呼ばれる三基の石碑が立っています。ここから眺める陽光きらめく王子ヶ浜には心躍らされます。

この先は平坦な道となり、江戸初期のものといわれる「孫八地藏」を通り、金光稲荷（こんこういなり）神社が祀られています。神社から少し下って、左手の枝道を一〇分ほど行けば熊野灘を一望できる展望台があります。分岐点に引き返し



て、ゆるやかな下り坂を行けば石畳が残っています。一〇分ほどで高野坂登り口に出ます。さらに道標に従ってJR三輪崎駅を目指します。

②大門坂から熊野那智大社・青岸渡寺へ

熊野三山巡礼の最終目的地である熊野那智大社を目指すクライマックス部分に当たる大門坂(だいまんざか)は、往時の面影を色濃く残す石畳道が圧巻です。

社殿風の駅舎、JR那智駅には、熊野那智世界遺産情報センターが併設されています。センター内には日帰り温泉施設もあります。那智駅前の国道四二号線を渡ると、浜の宮王子(熊野三所大神(おのみわ)社)と世界遺産の補陀落山寺(ふだらくさんじ)が並んで立っています。本来両者は一体のものであり、神仏習合の名残を留めています。

補陀落山寺は、那智の浜の近くにあり、補陀落渡海の拠点となったことで知られる世界遺産の古寺です。

かつて、南海の果てに観音菩薩の浄土・補陀落があるという信仰がありました。補陀落とはサンスクリット語で観音浄土を意味する「ボドラカ」に由来します。そこでの往生を願って、わずかな食料と水を積んだ小船に閉じ込められ、沖に向かったのが補陀落渡海です。自らの身を犠牲に人々の苦しみを救う捨身行で、実際には死出の旅でした。平安時代から

江戸時代にかけて二〇回ほど行われたと伝わり、境内には渡海船の復元模型が展示され、寺の裏山には渡海上人の墓が立ち並んでいます。

寺の右隣には熊野三所権現を祀る大神社(浜の王子)があります。那智権現の本地仏の千手観音を祀る千手堂が現在の補陀落山寺にあたります。

また、駐車場脇には中辺路と大辺路の分岐を示す「振分石」と呼ばれる一七世紀中頃の石碑が立ちます。

浜の宮王子は藤原宗忠の日記『中右記』に名が見え、那智山参詣前に海水で身を浄める潮垢離(しおごり)を行ったところからです。

補陀落山寺の駐車場の横の道を那智山へ向かって約五キロメートル歩けばよいのですが、那智駅に戻って、バスで大門坂入口まで行くことも出来ます。バス停からすぐの大門坂入口から大門坂へ向かいます。那智の聖域と俗界を分けるといふ振ヶ瀬(ふりがせ)橋を渡れば、推定樹齢八〇〇年という「夫婦杉」が立っています。大門坂はここから始まります。

大門坂は全長約六〇メートル、標高差約一〇〇メートルです。鬱蒼とした巨杉の間を階段状の堂々たる石畳道が続いて圧巻です。少し登ると、熊野九十九王子の最後の王子社だった多富気(たふけ)王子跡があります。社殿は一八七七年に那智大社内に移され、現在は石碑のみ立っています。坂を登り切ると那智山駐車

場に合流します。

ホツとするのもつかの間、那智大社へは、さらにここから四七三段の石段を登らなければなりません。那智黒石の硯などを売るみやげ物店が並ぶ階段を登り切ると、鳥居が見え、ようやく熊野那智大社に到着します。

熊野那智大社は、那智原始林に包まれた高さ一三三メートルの那智大滝に対する自然崇拝に端を発します。熊野三山の一つとして熊野御幸の上皇や貴族らも参拝し、また平重盛や豊臣秀吉、徳川吉宗など時の実力者によって社殿の再興や改修が行われてきました。六棟からなる現在の朱塗りの本殿は、幕末期の再建とされ国の重要文化財に指定されています。第四殿に主祭神である熊野夫須美大神(ふすみのおかみ)を祀ります。この神を含め本宮・速玉大社と同じ十二柱の神々が祀られますが、那智大社では「飛ろう権現」を加えて「二三所権現」とも呼ばれます。

朱塗りの鮮やかな社殿の隣に、古風な那智山青岸渡寺が建っています。江戸時代までは熊野権現の「如意輪観音堂」で、西国三十三ヶ所観音巡りの一番札所です。今こそ寺と神社に分かれています。本来は一体でした。神仏習合の姿を留める聖地です。

境内から那智大滝を遠望し、今度は急な階段を下って行くと、杉木立の間に那智大滝が近づいて見えてきます。那智大

社の別宮・飛ろう神社は那智大滝を二神体とする神社で社殿がありません。日本一の大瀑布の前に立つと引き込まれそうになります。

石段を引き返し、滝前バス停から帰路につきます。

長らく「道を行く」シリーズにお付き合い頂きましてありがとうございます。「熊野街道」ウォーキングは今回をもって終了といたします。これまで「芥川だより」に書いてきた文章に加筆・訂正を加え、「まとめ」を付けて『われもまた熊野古道』と題して「道楽本」を自費出版いたしました。『我が奥の細道の旅』よりも、地図・写真・装画が満載で美しい本に仕上がりました。もしよろしければ一〇〇〇円でお分けします。下記住所に普通郵便でかまいませんから、一〇〇〇円(送料込み)を同封してお申し込みください。宛先の住所に本をお送りします。

〒532-0012

大阪市淀川区木川東2-13-3

成瀬和之

成瀬 和之

今回はいよいよ商品についてです。

かつて「私は嘘は申しません」と言った政治家がいました。だから、あなたは本当なんだと信じますか？本当かどうかは発言と事実を照合してみなければわかりません。政治家の言った「言葉」と「事実」が食い違うことを、この数年間たびたび見てきました。森友学園問題に関する公文書が廃棄されたからと言って、起こった事実が消えてなくなるわけではありません。

「私は一人で生きている。誰にも迷惑をかけていないし、誰にも迷惑をかけたくない」と話す人がいるとします。果たして本当でしょうか？無人島に流れ着いたロビンソンクルソーならば、自分で家を建て、着るものや食料を調達して生きているのかもしれませんが、でも難破した船から持ってきたナイフがポケットに入っていて、それに助けられているのではないのでしょうか。ナイフは誰かほかの人が作ったものです。

現代を生きる私たちは、Aさんが家を建て、Bさんが服を作り、Cさんが米を作り等々という風に、多くの分業で、つまり、人様に支えられて生きているのが事実です。ここでも「言葉」と「事実」が真逆なのです。

現代は資本制経済の社会です。この社会は最高度に発達した商品経済社会です。お互いに生産したモノやサービスを交換し合って生きているのです。市場でそれぞれの人が生産したモノを交換して、衣食住など必要なものを調達して私たちは生きています。

『資本論』第一巻の冒頭は、次のように始まります。

資本主義生産様式が支配している諸社会の富は、「商品の巨大な集まり」として現れ、個々の商品はその要素形態として現われる。したがって、われわれの研究は、商品の分析から始まる。

商品経済社会では、生産における人と人との関係が、商品と商品との関係として現われます。本質は人と人との関係なのに、現象はモノとモノとの関係として、市場では「逆立ち」して見えるのです。マルクスは、人が神を崇めるのになぞらえて、この「逆立ち」を「物神崇拜」と名付けました。マルクスは、次のように書いています。

テーブルは、その脚で床に立つだけでなく、他の商品に対しては頭で立ち、その木の頭から、テーブルが勝手に踊り始めるのよりもはるかに奇妙な妄想を展開する。

ユーモラスな表現ですね。商品となったテーブルは、市場で他の商品たちとひとりでに踊り出し、有無を言わず人間

をダンスに巻き込んで狂わせていきます。しかし、笑い事ではありません。どれだけ多くの人が、そのために人生を狂わせたことか。

資本主義社会は最高度に発達した商品経済社会だと言いましたが、社会の富には、自然や公共財など、市場では売買されない、つまり商品ではない富が半分を占めていました。

新自由主義（市場原理主義）は、その残された自然や公共財を次々と商品化しようとし、医療や教育・保育、図書館まで商品化を進めていきました。公立病院、保健所が統廃合・縮小され、コロナ禍の中、大変な事態を生み出したのも、行き過ぎた商品化の流れの中で起きたことです。

今回は「商品」について見てきました。いろいろ疑問も湧いてくるでしょうが、細かな、例外的な議論には触れずに、「逆立ち経済」の「あらずじ」をたどっていきます。今回は「貨幣」です。

俳句

土田 裕

年の瀬や忙し忙しと長電話  
今日もまた喪中のはがき年の暮  
歳末や野菜一束売れ残り  
知らぬ歌ばかりを聞いて大晦日  
テレビよりまた近くより除夜の鐘

影山 武司

早池峰の語り部の注ぐましら酒  
今年米羽釜に水の光りをり  
旅雑誌に付箋ばかりや暮の秋  
瘡蓋のひび割れてきし冬隣  
古傷のふいに疼きて今朝の冬  
拝殿の千木の金色冬日かな  
大太鼓の撥に手を添へ七五三  
古絵皿照らして银杏落葉かな  
日だまりの骨董に寄る冬帽子  
手回しの蓄音機鳴り冬ぬくし



## 人生としての川柳

岩手県北上市に日本現代詩歌文学館がある。短詩形文学、短文学などと称されることもある領域の文学を対象とする(おそらく)国内唯一の文学館である。そのホームページを見ると、「詩歌、「しいか」と読んでください。詩と歌のことです。古くは漢詩と和歌をさしましたが、いまは短歌・俳句・詩・川柳などの総称として用いられています」とある。この説明を、皆さんはどう思われるか。

私は、「現代詩歌」を冠に戴く文学館が、かくも明確に川柳を詩歌の一領域に位置付けていることに驚くとともに大きな喜びを感じた。その見識の高さに安心したと言った方がいいかもしれない。何故か。この真つ当な見方が必ずしも大方の国民や文学愛好者、また文芸評論家の見方とは一致しない、稀なる見方であるからである。川柳を文芸、文学の一領域と見る者はいまだ少数派である。ある意味で最も先進的と言える「しんぶん赤旗」の文芸欄には、多くの新聞と同様に、読者の文芸として詩・短歌・俳句・川柳欄がある。また、月に一度、現役の詩人・歌人・俳人の詩歌を紹介する「今月の詩」・「今月の短歌」・「今月の俳句」欄がある。しかし柳人の「今月の川柳」欄は無い。さらに、著名な詩人・歌人・

俳人がそれぞれの領域の最新動向を紹介する「詩壇」・「歌壇」・「俳壇」もあるが、「柳壇」は無い。誤解を恐れずに言えば、いかなるタブーをも恐れない赤旗にして、これが川柳に対する扱いである。

一方、「川柳。何とダンディで、楽しく、人生智のウイットにあふれた文芸。人類最高の文芸と思う」——こう書いたのは、作家の田辺聖子である。氏には、『道頓堀の雨に別れて以来なり』の上下一三〇〇頁に及ぶ大著がある。描かれたのは『川柳番傘』を育てた川柳家・岸本水府とその時代、大正から昭和初期の時代である。タイトルは水府の句。『中央公論』に五年八か月にわたり連載され、一九九八年(平成十年)刊行、多くの賞を得た。第50回読売文学賞評論・伝記賞、第26回泉鏡花文学賞、第3回井原西鶴賞である。読売文学賞の井上ひさし選評「近代川柳の全体図示」に、「秀句三千をちりばめた近代川柳史の決定版を得たのである。これはひとつの文学的快挙だ」とあり、中西進は書評に「水府に託して近代日本の生態史を書いた」と述べた。

かつて、岩波書店の雑誌『世界』——九四六年十一月号に掲載された桑原武夫の論文「第二芸術——現代俳句について——」をきっかけに第二芸術論争が起こったとき、あるいは今この論争を振り返るとき、それでは川柳はどう

なのかと川柳が頭をほんのちよつとでもかすめる人が、評論家を含めてどれほどいるだろうか。皆無とは言われないが、先ずいないだろうと思う。

田辺氏も先の大著の「あとがき」に嘆く。「終戦後、一挙に川柳の社会的地位は落ちて、幕末風狂句の俗臭にまみれてしまった。歪められた人間性の解放で、川柳のもつ足取りの軽さが悪用されたらうべきだろうか。現代も心ある川柳作家たちは憂慮して、川柳の文学性を守ろうと社会に提唱していられるが、まことに現代ほど川柳が誤解され貶められているときはない。

日本文学史にも川柳の項はなく、インテリは見向きもせず、新聞・雑誌、各種団体の川柳募集は、〈編集部選〉として平然としている。(短歌や俳句の投稿欄に、編集部選、がまかり通るものだろうか)

柳誌は多く、川柳人口も多いのに、川柳の社会的・文学的権威はいっこう高まらない

サラリーマン川柳やシルバー川柳のすべてがそうだとはいわれないが、この社会的風潮は今も変わっていないと思う。

俳句と川柳では人の見る目が違う。「趣味は何ですか」と問われて「川柳をやっています」と言うのは憚られるのが本音らしい。確かにそうであるが、しかしまた、俳句と川柳の境界がそれ

ぞれからの接近または越境によって区別出来なくなってきたのも事実である。「言いたいことが言えない、すなわち、言わないで言う文芸」が俳句であるなら、「言いたいことをまっすぐに言う文芸」が川柳であろう。言わないで言おうと、言いたいことを言おうと、言うことに変わりは無いのだから両者の区別の本質を問うことにどれだけの意味があるかは正直に言っ

てわからない。

表題に借りた「人生としての川柳」の世界を、次号から少しだけ覗いてみたいと思う。

## 編集後記

S K 生

突然のことで申し訳ありませんが、よんどころない事情で今回からネットによる発行となりました。心に思うことを秘めたるものとせず、どこかの場ではっきりと表明することは自立した人間の条件であり、そうした人間がいや増しに増していくことにより民主主義はよりよく発展していくことを編集者は信じています。本紙がそういう場の一つであることを願いつつ今後も編集作業を続けていく所存。その思いをくんでいただき、今後ともご支援のほど御願いたします。